『日本の思想』

丸山 真男 岩波書店／岩波新書

本館	請求記号：X/081/I95B/434	資料ID：700284730 700781149
神田分館	請求記号： /121/Ma59 [Knowledge Base展示中]	資料ID：100991074

文学部教授　中林 隆之

本書は、敗戦直後、「超国家主義の論理と心理」や「軍国支配者の精神形態」などの論文を発表し、近代天皇制の「無責任の体系」をえぐりだして圧倒的な名声を得、戦後民主主義の旗手として活発な言論活動を行った丸山真男（1914～1996年）の著書である。論文2本と講演記録を補訂した2本が収録されている。2021年9月の時点で109刷というロングセラーで、新書でありながらも、まさに戦後日本の「古典」と呼ぶにふさわしい作品と言える。

私は、学生の頃にこの新書を手に取って以来、折に触れて読み返しているが、本書にちりばめられた主張の多くは、今でも色あせていないと感じる。むしろ、グローバル化の進展とも相まって戦後的価値の多くが「清算」されつつあるように見える今日、ますます輝きを増しているのではないか。

＜権利の上にねむる者＞への警句から始まる小論「であることとすること」も重要であるが、一番のお勧めは、冒頭の論文「日本の思想」である。「日本における思想的座標軸の欠如」、その背景にある思想の「無限抱擁」と「精神的雑居性」、「思想が対決と蓄積の上に歴史的に構造化されないという「伝統」」といった構造的特質の析出をもとに、それらの社会的・政治的作用の仕方を近・現代日本に即して具体的に提示した丸山の論述は、厳しく且つ切れ味が鋭い。是非とも味読していただきたい。